

助け手

インコはいつもぴとぴとぴとと  
あとをついてきたものだった

あの日もぴとぴと足元に  
知らず踏み出した私の重みが  
インコの上に乗ったのだった

カゴに戻るもふらふらしてた  
手を差し出すと乗ってきて  
そうして小さな瞼を閉じた  
永遠に

ごめんなさい　ごめんなさい

遠くから手紙をくれた人がいた  
ことりに詳しい優しい人まだ見ぬ人

抱えきれずにこぼれる涙  
言葉に綴ってみませんか  
順番なんて考えないで  
こぼれて落ちる気持ちのままに、と

綴る言葉はあふれ出た  
声に出せない後悔言い訳自責悲しみ  
文字の衣を纏ったら  
ほどけていった心

ことりが旅立つ時にはね  
飼い主の手にいることが多いのですよ、と  
残る力で私の手に乗ってきた  
インコはゆるしてくれたのか

ごめんねがありがとうに変わった